初校	再校	三校	四校	念校	責了
藤野	末冨	末冨	末冨	末冨	

分野別・研究者が語る 私の『資本論』案内

労働者階級の発達への注目

石川康宏 神戸女学院大学教授

マルクスの歴史にそってマルクスを読み、『資本論』の歴史にそって『資本論』を読む。そうした問題意識にもとづくこの20数年の研究によって、『資本論』への理解はかなり大きく変わってきました。あわせて『資本論』を章ごとの輪切りにしてではなく、論理の積み重ねを通じて示されるその全体像をとらえるという問題意識も、大きな役割を果たしてきたと思います。

40年前の研究を振り返ると

そうした研究の今日的な到達点に立った時、私が若い頃に学んだ『資本論』の研究書にはどのような制約が見えてくるのだろう。そんなことを思って『マルクス「資本論」研究（上下）』（1980年、新日本出版社）を、およそ40年ぶりにながめてみました。監修者の1人である岡本博之氏は、この本が「『資本論』の発刊100年を記念して出版された雑誌『経済』臨時増刊号（1967年5月）への読者からの大きな反響」を出発点に、「現在に至る情勢と理論の発展をふまえて……構成、内容をまったく一新し、上梓されたもの」だと力を込めています。上下巻の全ページに赤鉛筆、青鉛筆、万年筆の黒インクでの線が引かれており、懸命に内容を理解しようとした若い自分の姿も見えるような気がしました。

さて、読んで気づいたことの一つは、社会を制御する労働者の能力の発達という論点がどこにも登場しないということです。「労働日」や「機械と大工業」の章の検討はもちろんありますが、そこでの労働者のたたかいと成長、それを通じた社会の漸進的発展といった問題の検討はまったくないのです。

二つ目に、では未来社会に向けた変革主体の形成はどう論じられているかというと、「資本主義の全般的危機」論がその不足を補うものになっています。それは『資本論』の研究としてではなく「『資本論』の直接の続編としての『帝国主義論』」といった形で述べられており、その究明はレーニンによるものとされ、他方で「生成期」という注釈はあるものの、ロシア革命以後、世界史は資本主義の崩壊と社会主義の成長の時代に入ったという歴史認識も大きな意味をもつものとして展開されています。

三つ目に、資本主義の基本矛盾は、エンゲルスが定式化した生産の社会的性格と取得の資本主義的形態の矛盾としてとらえられ、矛盾の深化はもっぱら「生産の社会化」（社会的性格の広まり）によってとらえられています。「生産の社会化」は生産手段の巨大化にともなう「労働の社会化」という論点を含みましたが、この論理だけでは資本主義社会の改革や未来社会への変革を担う労働者の発達は解けません。

四つ目に、「新メガ」によって『資本論』関連資料の「全容が明らかにされるのはかなりの将来に属する」という当時の研究条件の制約もあって、『資本論』内部の歴史への注目はほとんどありません。経済学批判の6部編成や『資本論』を「資本一般」の一部に位置づけるなどの当初のプランは晩年まで不変だったと理解され、また『資本論』第2部、第3部の内容も基本的にはその全体が第1部完成稿と同一の地平にあるものとして検討されています。

五つ目に、未来社会論ですが、『資本論』第三部に述べられた「必然の王国」と「自由の王国」の関係については、エンゲルスの『反デューリング論』の記述に引きつけられてか、共産主義の低い段階から高い段階への発展ととらえる見地と、それを未来社会における労働時間と人間の個性の発達に必要な余暇時間ととらえる見地が併存しています。

「精神的武器」を練磨して

こうしてまとめてみると、この数十年の『資本論』研究の深まりはとても大きなものでした。他方で、そうした研究の深まりに応じて次々と新たな姿を見せるマルクスの巨大さ、汲めども尽きぬ深さと広さにもあらためて驚かずにおれません。

研究の対象が19世紀後半までの資本主義にとどまり、知識が当時の学問の到達に限られたなど、その内容に歴史的制約があることは間違いのないところですが、それにもかかわらず人間社会の歴史と構造と、すでに確立していた資本主義社会の根本をとらえるマルクスの力は凄（すさ）まじいものでした。

若きマルクスは「哲学がプロレタリアートのうちにその物質的武器を見いだすように、プロレタリアートは哲学のうちにその精神的武器を見いだす」（ヘーゲル法哲学批判序説）と述べました。そして、マルクスはこれを後年に向けて拡充し、社会変革の「物質的武器」である労働者階級の発達の必然を究明する一方、その労働者たちに提供する「精神的武器」の探究と錬磨に取り組みつづけました。『資本論』はその核心をなすものとなっています。

マルクスの深みに挑みながら現代社会に挑み、社会変革の運動に加わりながら理論の探化に取り組む。そうした姿勢をもってマルクスや『資本論』に挑戦することを、とりわけ若いみなさんに呼びかけたいと思います。

（いしかわ・やすひろ）

036-037_KZ190510_石川.05a_WCC18.indd 全ページ 2019/04/17 18:55:56